

花の歌歳時記

前田康子

町の中に、一つでも好きな木や、花の咲く自分だけの場所があれば、楽しいだろう。車に乗ってはいはわからない。子供たちを連れて歩いて、いろいろな角を曲がって見て、よその家の庭を覗き込んだり、知らない木があれば名前を聞いてみたり。

好きな道がある。何でもない土手の道で十分くらいの距離だが、五月になると道に沿って、イチゴツナギや、姫小判草が咲く。面白い名前の植物だけれど、イネ科の雑草のような植物だから、だれも摘まない。ひたすら風に吹かれて、足元をくすぐるように揺れつづけている。

四歳になる息子が、一人一人通れる細い道を見つけ「秘密の道」と名づけて通っている。そこを通るときだけ忍者にでもなった気分です。昂揚（あきま）とした足取りである。狭い道をばつと抜け出ると、ツバメが低く飛び交い、商店街のにぎやかな声がしてくる。



絵・カキツバタ／小柳吉次

百合の木

百合の木。はじめて名前を聞いたとき、草花である百合が枝から咲いているような、不思議な錯覚を感じた。

花はどちらかというとチューリップに似ている。チューリップの木や、葉の形からハンテンボクという別名もある。

輝きをあつめてゆりの木は没^{しず}む中庭を
白衣の人過ぎにけり

永田和宏^{ながわた かつひろ}・華氏

百合の木を最初に知ったのは、この歌である。永田氏の京都大学の研究室に行くことがあったので、中庭を探してみたが、わからなかった。

その後、京都市役所の前にあったと友人に聞き、見に行った。一度見ただけで、おぼえられる木だった。葉の形が独特で、同じ形の葉の木は他には見かけない。

ゆりき
百合の木

膝くらくたつている今あとなにを失えば
いい ゆりの木を抱く

江戸 雪 『百合オイル』

「ゆりの木」という言葉の響きが官能的なイメージを連れてくる。膝^{ひざ}から下のくらさと、百合の木の鬱蒼^{うっそう}とした翳^{かげ}り。その中に揺れるように女は立っている。

ふる夜空より枝を垂るるゆりの木は女
陰もてる神のごとくに立立つ

玉城 徹 『穆木』

夜の百合の木。見上げたとき、それは女陰を持つ神のようだったという。何かを今にも生み出しそうであり、何かを飲み込んでしまいうそりでもある。



藤

公園の藤棚の花が咲くと、毎年同じ現象が起こる。強い藤の花の香に誘われて来る、熊蜂や、はなむぐりを怖がって、子連れの母親たちがぎゃあきゃあど逃げける。

近頃は虫嫌いの人が本当に増えた。蚊すら怖いという。熊蜂も、はなむぐりもおとなしい虫たちなのに。

藤の蔓には、種類によって右巻き、左巻きがあるらしい。志賀直哉が小説『矢島柳堂』

に書いている。公園の藤の木は、根元の方は蔓が絡んでいるのが、年月とともにくつついて、一本の幹のようになっていく。

あの花がこわいという子の手を握り藤棚のある公園ぬける

中津昌子 『風を残せり』

夜の公園に、一気に咲いた藤棚の花が美し

い。子供の頃、藤は大人の花という気がしていた。豪華で気品高く、子供を寄せ付けないうような花。

白藤のせつなきまでに重き房かかる力に
人恋へといふ

米川千嘉子 『夏空の櫛』

枝垂桜もそうだが、垂れて咲く木の花というのには独特の雰囲気がある。白藤は、花が真っ白な品種。

あらたえの藤の花房ゆれやみてとおき
手紙を書かむとおもう

大滝和子 『銀河を産んだように』

「あらたえの」は藤にかかる枕詞。藤が咲く頃はもう初夏である。窓からむつとするほど草木の緑の匂いがある。こんな日は、誰かに手紙を書いてみたくなる。

生ける世のさびしくならば此処に来よ
谷にたなびく藤浪の花

土屋文明 『青南集』

山に咲いている藤は、まわりの木にからみついて花を咲かせている。これは文明が友達十人と、妻を連れて、那須を旅して作った作品。



ふじ藤





クローバー

クローバー

クローバーは、花を摘んで花輪を作ったり、四つ葉の葉を探したりと、子供達が今でも遊んでいる。四つ葉を探しあてたことがない。母が摘んでくれた四つ葉が押し花に残っているだけだ。

子の摘みしクローバーの花を嗅ぎしより幾度も我は嗅ぎつつ行きぬ

高安国世 眞実

クローバーの花は、外国の石鹸せっけんのようなきつい香りがする。たくさん摘めば手のひらに残っている。子供たちと春の野に行った記念に。

クローバーの丘に少女は連れゆきて犬にも首輪を編みやりしとぞ

大西民子 光たばねて

クローバーの花からは上等な蜂蜜はちみつが取れるという。春の野にやってくる蜜蜂はちみつは見ているとかわいい。花粉団子を肢たにつけて、休憩しているような蜂もいる。帰る時間も忘れて犬の首輪を編んでいるのだろう、少女は。

時鳥なき疲れたる朝明けのあかつめくさやしろつめくさや

松平修文 水村

クローバーはしろつめくさとも言ふ。オランダ人が貿易のとき、われものの詰め物にこの草を使い、日本に渡ってきたという。同じような花で色違いのあかつめくさもある。明け方の時鳥ときどりの悲しい声。野に咲く花。寝床の中でそれらを思っているのだろうか。幻想的な感じがする。

まえだ・やすこ 「塔」会員